

ワンポイント・ブックレビュー

スチュアート・タノック著、大石徹訳

『使い捨てられる若者たち アメリカのフリーターと学生アルバイト』

岩波書店（2006年）

「フリーター」という言葉が流通するようになって、20年ほどになるだろうか。バブル期の人手不足と、リクルート社に代表される人材ビジネスの興隆を背景にして、プラスイメージを担わされて登場した言葉だが、それが表現する働き方・生活スタイルに対して眉をひそめる「大人」も当初からいたように記憶している。いつの頃からか、もっぱら「フリーター問題」と問題付きで語られるようになり、近年は「ニート、フリーター問題」と接頭辞までつくようになった。

ニートについては措くとしても、長期不況下でのリストラ、グローバル化による企業間競争の激化の中で、正規雇用の非正規雇用への置き換えが進み、「良好な雇用機会」が大量に失われた結果、政府の推計でフリーターが400万人を超えるまでになっている。フリーター増加は消費の減退、税収減少、年金制度の破綻などをもたらす大問題と考えられるようになってきた。

フリーター増加とは、かつては若者の仕事、あるいは学生のアルバイトとみなされていたような仕事にいつまでもとどまり続ける人が増えていることをも意味する。各種調査が示すように、不安定な非正規雇用で働くフリーターの多くは、正社員になることを望んでいる。そうした希望が実現できればもちろん望ましいが、非正規雇用の労働条件を上げることも必要だろう。

「働く若者 労働組合のあるファストフードおよびスーパーマーケットの職場」という原題が示すように、本書はこれらの産業で働く若者に焦点を当てている。これらは、典型的な「若者の仕事」と考えられ、非正規雇用一般にもまして、労働政策では顧みられることの少ない職場である。ジェンダーや人種などによる差別には相当に敏感になった北米社会でも、若者だから低い待遇でもいいという「年齢差別」がまかり通っている、と著者は考える。連邦最低賃金引き上げを主張するリベラルも、それに反対する保守派も、「豊かな10代の若者」の権利や利益は他のグループに比べて軽視されてよいという暗黙の前提に立っているという指摘は、なかなかラディカルである。それは、「家計補助労働」だからとパートタイマーの労働条件や諸権利があまり顧みられなかった従来の日本の職場や労働組合のあり方を連想させる。

本書は、アメリカのある都市圏のスーパーマーケット労働者と、カナダのある都市圏のファストフード労働者を対象に実施した広範な聞き取り調査がベースになっている。一種のエスノグラフィーともなっている。原題にあるように、両者とも労働組合が組織されている。この二つの組合は、前者はビジネス・ユニオニズム、後者はソーシャル・ユニオニズム(社会運動モデル)という異なるスタイルをもっている。産業の違いと、組合の運動スタイルの違いがからみあって、職場の日常生活とそこに関わる労働組合のありようが描かれていて、興味深い報告になっている。

本書には、仕事と生活の分け入ることではじめて聞こえてくる生の声がちりばめられている。それらは、仕事そのものに内在する論理とそこで働く人の生活スタイル・感性といったミクロの世界と、労働条件、労働者の権利、社内諸制度、社会的諸制度といったマクロの世界をむすびつける働きを、労働組合というものはするのだ、とあらためて感じさせてくれる。(Y.R.)